

論文審査の結果の要旨および担当者	
学位申請者	井上 裕香子
論文担当者	主査 石戸 聡
	副査 若林 一郎
	副査 黒田 悦史
学位論文名	Epidemiological survey of tick bites occurring in Hyogo
	Prefecture from 2014 through 2018
	(兵庫県における2014～2018年のマダニ刺症に関する疫学的調査)
論文審査の結果の要旨	
<p>兵庫県内ではマダニ媒介性感染症として重症熱性血小板減少症候群（SFTS）、日本紅斑熱が発生している。これら感染症のリスクを考える上で、県内のマダニ刺症の実態を把握することが重要である。今回、2014年から2018年の5年間に、兵庫県内でマダニに刺されて医療機関を受診した症例のうち、県内各地の医療機関から情報を提供された519例について検討した。</p> <p>患者の性別は男性222例、女性297例、年齢は0～95歳で、中でも70歳代が最多で124例であった。刺咬時期は5～7月が353例で全体の68%を占め、マダニの主な活動時期に一致していた。原因マダニ種としては8種類が確認され、タカサゴキララマダニ（AT）が431例と最も多く、次いでフタトゲチマダニ（HL）が72例であった。一方、頭頸部の刺咬例を原因種別に見ると、ATでは4.4%であるが、HLでは30%であった。マダニの除去方法として、医療機関を受診し局所麻酔下に摘出された例が154例と最も多く、次いで患者自身で除去した症例が123例であった。さらに、519例中、178例で抗菌薬を投与されており、そのうち123例がテトラサイクリン系であった。兵庫県を5つの地域に分け、それぞれのマダニ刺症の症例数と原因種について検討した結果、阪神地域が154例と最多であり、次いで淡路地域133例、播磨地域132例であった。いずれの地域でもATによる症例が最も多かった。AT刺症431例中、ライム病に類似した直径5cm以上の大きな紅斑を生じた症例は61例あり、tick-associated rash illnessと考えられ、ライム病との鑑別が重要であった。今回の検討症例中にSFTSやJSFなどの感染症の発症はなく、総合的にはマダニ刺症に伴う感染は偶発性であることが実証された。</p> <p>本研究は、兵庫県内でのマダニ刺症とそれに起因する感染症の実態を詳細に検討したものであり、兵庫県におけるマダニ刺症に関する治療に重要な知見を提供した。従って、本研究は、学位論文に値すると判断した。</p>	